

# 唾液で新たなPCR検査

## 鹿大教授ら臨床研究 診断までの時間短縮

鹿児島大の教授らの共同研究チームが、唾液を用いた新型コロナウイルスの新たなPCR検査方法の臨床研究を進めている。既に確立したインフルエンザの診断方法を応用。従来の方法に比べ診断までの時間が短く、鼻の粘膜をこすり取る際の痛みもないといい、早期の実用化を目指す。



新たな診断方法でウイルスの有無を調べる隅田教授

## 採取に痛みない利点も

現在、唾液を用いた検査については国内外で研究が相次いでいる。同大で臨床研究を進めているのは、工学部の隅田泰生教授（糖鎖生化学）ら。隅田教授は2006年に起業したベンチャー（新興企業）で、インフルエンザ検査の手法を開発している。

ウイルスは、感染する際に細胞の表面にある糖がつながった「糖鎖」に結合する性質があることに着目。糖鎖を含んだ磁性のある粒子の液体を独自に作って患者から採取した唾液と混ぜ、磁石を近づけることでウイルスを集めてPCRの測定器で診断する。

この方法は遠心分離器を使う必要がない分、検査の時間短縮ができ、これまでの方法と比べて検出度も高いという。厚生労働省から「先進医療」の承認を得

て鹿児島市の小児クリニックなどで採用されている。

隅田教授らは、この診断方法は新型コロナウイルスでも応用が可能として、3月から臨床研究を開始。同市の医療機関で唾液のサンプルを集め、従来の方法と結果が一致するか、ウイルスを検出しやすいとされる起床時とそれ以外の時間帯で結果に差異が生じるかを調べている。

新型コロナウイルスのPCR検査を巡っては、鼻の粘膜をこすり取る際、患者がせきやくしゃみをして医療従事者が感染する恐れが指摘されている。厚生省は検体に唾液を使うことを認める方向で検討を進めており、国立感染症研究所などで高い精度の検査ができるかを確認する研究が実施されている。

隅田教授は「鼻の奥の粘膜を採取する方法のような痛みは全くないのも利点で、精度の高さと迅速さを臨床研究で実証して全国に

普及させていきたい」としている。

今後、数百検体を目安に他の医療機関への協力も打診して臨床研究を進め、保険適用を目指す。共同研究者の中央病院（鹿児島市）臨床研究センター長の加治屋崇医師は「医療従事者への感染リスクと、検査結果が出る前に出歩いて二次感染を引き起こすことを防ぐことができ、救急外来や手術前の選別検査など、より多くの場面での使用も可能になる」と話している。

読売新聞(地域欄)  
2020年5月28日(木)